

JACCRO 短期海外派遣 -ASCO 2010 に参加して-

久留米大学病院
集学治療センター
講師・峯 孝志

特定非営利活動法人 日本がん臨床試験推進機構 (JACCRO) の短期海外派遣制度によって、この度、American Society of Clinical Oncology (ASCO)の Annual meeting '10 に参加させていただいた。ASCO は名前こそ American Society ではあるが、実際には世界の癌治療をリードする主要な学会の一つである。今年もイリノイ州シカゴの巨大な会場である Maccormick place にて 6 月 4 日から 8 日まで開催された。シカゴは五大湖の一つミシガン湖の南西岸に位置し、全米第 3 位の人口を有する大都市で、Maccormick place もミシガン湖のそばに建っている。学会が催された 6 月は日本よりも少し気温が下がる程度のとても良い気候で、街の中心部はとても治安が良いところである。ASCO annual meeting は今後 10 年間、シカゴでの開催が決定しているとしている。

この meeting では会場が広く、ホールも大きいため、どの発表でも入りきれないことはなかったものの、発表数自体はとても多く、全体を見渡すことはとてもできない。この中で興味のあるセッションにのみ参加することにした。大規模臨床試験の結果は勿論だが、ポスターセッションでは小規模第 2 相試験や新規薬剤の第 1 相試験などの報告も数多くみられ、大変興味深い。癌種を問わずに見渡すと、分子標的薬剤での試験や研究が多くみられ、免疫療法に関しても抗 CTLA4 抗体による試験結果がプレナリーセッションで報告されていた。結果は同抗体治療の効果と有用性が証明されたものだが、意外なことに同時併用した gp100 ペプチドワクチンが役に立っていなかった。これについての合理的な説明も免疫学的評価も十分なものはなかったため、今後議論がなされるべきものであった。胃癌の分野では negative study であることがすでにプレスリリースされていた AVAGAST study の結果が報告された。標準化学療法に Bevacizumab を上乗せする第 3 相試験で、無増悪生存期間 (PFS) などでは有効性がみられたにもかかわらず、主要評価項目である全生存期間 (OS) で有意差が得られなかった。サブ解析において人種差、とくにアジア種において上乗せ効果が得られていない。二次治療を受ける割合が多い日本などの東アジアと二次治療割合の少ない欧米との治療環境の差や、抗癌剤治療感受性の違いなども影響している可能性に言及されていた。しかしながら、肺癌における試験でも Bevacizumab 上乗せの PFS 延長効果により保険承認されたものの、OS では効果を認めていない。ほかの癌種でも同様の傾向にあり、分子標的治療中止後の急激な増悪が予後の延長効果を打ち消してしまう可能性なども考えなければならぬのかもしれない。また、海外およびグローバル試験のデータを安易に日本人に外挿することは慎まなければならない。国内での試験の重要性が再認識された。海外の

二次治療の割合が少ないことは日本の医療との違いを際立たせる。二次治療の開発においては海外での質の高い臨床研究は期待しがたい。現在、国内で進行中の **JACCRO GC05** 試験を含む二次治療の臨床研究は意味深いものであり、早くその結果を得たいものである。

最後にこのような経験と勉強の機会を与えてくれた **JACCRO** に感謝します。